

平成22年度当院看護師のがん看護学習ニーズに関する調査

Cancer Nursing Research on the learning needs of hospital nurses FY2010

看護部：伊藤紗弥香 百瀬華子 宮下幸恵 越由香里 加藤祐美子

信州大学医学部保健学科：橋本みつほ 政時和美 北條佐智子

要旨

当院が都道府県がん診療連携拠点病院に指定されてから、がん患者の受診が多くなり現在では約4割ががん患者である。がん医療に携わる看護職の人材育成のために勉強会や事例検討会を行ってきた。しかし年々参加人数が減少し、プログラム自体の見直しが必要であると思われ、看護師の学習ニーズを明らかにしたいと考えた。そこでアンケート調査を行ったところ、がん看護への関心が高いことが明らかになり、対象者を絞った学習計画を立てることが必要と示唆された。

キーワード：がん看護、学習ニーズ、がん診療連携拠点病院

はじめに

当院では平成18年度より、質の高いがん医療の提供体制の均てん化を目的に全国に整備された、都道府県がん診療連携拠点病院（以下、拠点病院）に指定されている。指定後、当院ではがん患者の受診が多くなり現在では約4割ががん患者である。そのため、がん医療に携わる看護職の人材育成は急務と考える。当院では、病院—大学連携事業の一環として、がん看護全般の質向上を図るとともに、各セクションにおいてリーダーシップを発揮することができる看護師を養成するという目的で、平成19年度よりがん看護プロジェクトが開始された。これまで、勉強会や事例検討会を行ってきたが、特に勉強会への参加人数が年々減少しつつあり、プログラム自体の見直しが必要と考えた。がん看護の質を維持・向上させるためには、学習の機会が不可欠であり、また看護師の学習ニーズに一致したものである必要がある。しかし、当院ではがん看護への興味・関心・知識獲得程度に関する調査は近年行われていない。そこで、がん看護に携わる看護師の学習ニーズを把握し、その結果から、がん看護の専門研修をはじめとした学習内容の充実を図りたいと考えた。

目的

この調査では、当院看護師のがん看護を学ぶニーズやがん看護のどの内容に関心があるのかを知

り、資質の向上を目指したプログラムを検討するための基礎資料を得ることを目的とした。

方法

対象者は当院全看護職員の中から、管理部門、師長、認定看護師、特別休暇を除く 569 名を対象とした。調査期間は平成 22 年 6 月 28 日から 7 月 13 日までの 2 週間とした。先行研究^{1) 2)}を参考に質問紙を作成した。調査内容は、性別・経験年数等の基本属性、がん看護や緩和ケア医療に関する研修や教育経験の有無、基本的知識の確認として世界保健機関 (WHO) 方式癌疼痛治療法の認知度とモルヒネの有効性と副作用についての理解度、当院をはじめ県内各地の 8 病院が拠点病院であることやその役割の認知度、がん看護に関する知識技術の獲得程度と学習希望とした。最後のがん看護に関する知識技術の獲得の程度と学習希望は、1) がん看護の基本知識 2) がん看護の疫学、最新の診断・治療・看護 3) 患者・家族の心理と看護援助 4) がん患者のセルフケア能力を高める支援 5) 緩和ケアにおける看護の実際 6) がん化学療法における看護支援 7) 手術療法における看護支援 8) 放射線療法における看護支援 9) がん看護領域で必要な看護技術 以上の 9 つの大項目からなり、それぞれ 3～9 項目の質問から構成された。質問紙を回収後、単純集計を行った。

倫理的配慮

アンケートへの回答は自由意志に基づくことを明記し、アンケートへの回答をもって同意の確認とした。また、個人の特定がされないよう回答は無記名とし、回収は調査者が行い提出への圧力が及ばないようにした。なお、本研究は看護部倫理審査委員会の承認を得て行った。

結果

配布したアンケート用紙 569 部の内、340 部を回収し (回収率 59%)、記入不備のあるものを除く 332 部 (有効回答率 58.3%) を分析対象とした。

1. 対象者の背景

対象者の背景として、基本属性を表 1 に示した。男性が 5.7%、女性が 94.0% を占め、勤務形態は常勤 97.9%、パート 1.5% だった。通算経験年数は当院の現任教育プログラムを参考に年代別で分け 1 年目 6.9%、2～3 年目 20.5%、4～10 年目 42.4%、11～20 年目 13%、21 年目以上 9.3% だった。また、便宜的にがん病棟 (東 2、東 3、東 4、東 5、東 6、東 7、東 8、西 2、西 5、西 6、外来)、非がん病棟 (西 3、西 4、西 7、西 8、ICU、救急部、手術部、中央診療部)

と分けた結果、がん病棟 50.3%、非がん病棟 49.7%であった。

表 1 基本属性		(n=332)		
		人	%	平均
性別	男性	19	5.7	8.1 年
	女性	313	94.3	
経験年数	1 年目	23	6.9	4.4 年
	2～3 年目	68	20.5	
	4～10 年目	141	42.4	
	11～20 年目	56	13.0	
	21 年目以上	31	9.3	
	不明	13	3.9	
	がん看護経験年数			
病棟別	がん病棟	167	50.3	4.4 年
	非がん病棟	165	49.7	

2. 対象者の学習背景

がん看護に関する研修経験については「院内研修」を受けたことがある 45.3%、受けたことがない 52.6%であり、「院外研修」を受けたことがある 21.8%、受けたことがない 72.9%であった。しかし、がん看護に従事する病棟では「院内研修」を受けたことがある 60.5%、受けたことがない 38.3% (図 1) であり、「院外研修」を受けたことがある 25.7%、受けたことがない 68.9% (図 2) と全体と比較して受けている率が上がった。また、「緩和ケアに関する教育」 (図 3) については十分に受けている 1.8%、学んだことはある 45.0%、あまり受けていない 40.3%、全く受けていない 12.1%であった。

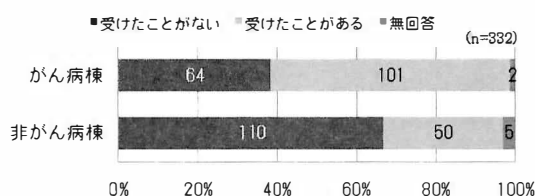


図 1 院内研修



図 2 院外研修

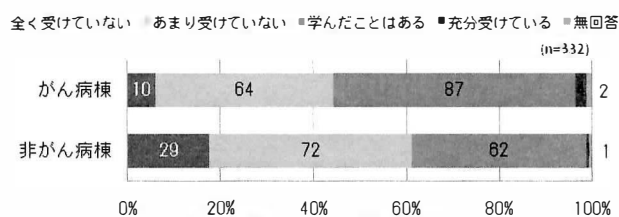


図 3 緩和ケアに関する教育

「世界保健機関（WHO）方式癌疼痛治療法の認知度」（図4）について、がん病棟では内容をよく知っている2%、内容をある程度知っている23%、あることは知っている41%、知らない34%であり、「モルヒネの有効性と副作用についての説明」（図5）に関する理解度については説明できる8%、多少は説明できる63%、説明できない25%、わからない4%であった。

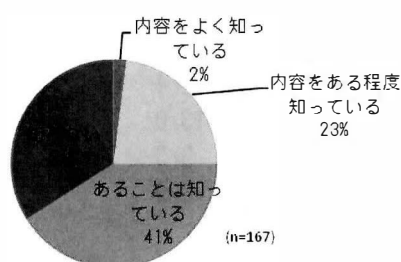


図4 WHO方式癌疼痛治療法の認知（がん病棟）

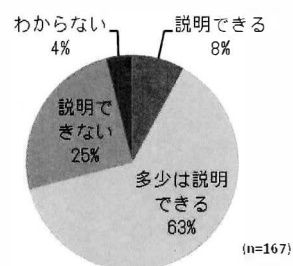


図5 モルヒネ使用の説明の認知（がん病棟）

3. 拠点病院に関する認知状況

拠点病院に関することについては「当院が拠点病院であることの認知度」（図6）は知っていた61.5%、知らなかった38.2%であり、「長野県内7か所にある地域がん診療連携拠点病院の認知度」（図7）は知っていた26.5%、知らなかった72.9%であり、「拠点病院の6つの役割の認知度」は役割・内容共に知っている0.6%、役割があることは知っている40.0%、全く知らない58.8%であった（図8）。

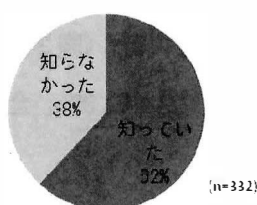


図6 拠点病院の認知（当院）

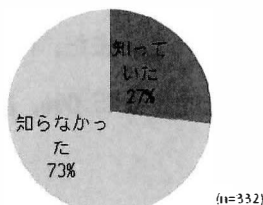


図7 拠点病院の認知（他院）

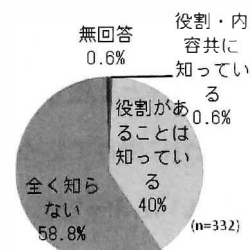


図8 拠点病院の6つの役割の認知

4. がん看護に関する知識・技術の獲得状況

がん看護に関する知識技術の獲得程度については、「非常にある」「ややある」と回答した者を合わせて、既に獲得しているものとして分析した。その結果、1) がん看護の基礎知識においては「麻薬の基礎知識及び管理」、「抗がん剤の安全な取り扱い方」や「コミュニケーション」については70%以上が獲得していた（図9）。2) がんの疫学、最新の診断・治療・看護については全ての項目において、半数以上が獲得していた（図10）。3) 患者・家族の心理と看護援助については「がん患者の心理過程の支援」、「I.Cの看護師の役割」や「家族看護」において60%以上

が獲得していたが、「ストレスマネジメント」や「サイコオンコロジー」において 60%以上が獲得できていなかった（図 11）。4）がん患者のセルフケア能力を高める支援では、全てにおいて半数以上が獲得できていなかった（図 12）。5）緩和ケアにおける看護の実際には、「スピリチュアルペイン援助」以外は全て 60%獲得していた（図 13）。6）がん化学療法における支援では、「造血幹細胞移植における看護師の役割」の獲得 40%程度であったが、「がん化学療法の有害事象への看護」、「化学療法の血管外漏出、複合禁忌」や「抗がん剤の安全な取り扱い方・実技」においては 70%以上が獲得をしていた（図 14）。7）手術における看護支援では、「手術室看護」は獲得が 40%以下だったが、それ以外は 60%以上獲得していた（図 15）。8）放射線療法における看護支援では、「外照射の実際と看護」においては 60%以上が獲得し、「放射線障害の予防とケア」は 50%以上が獲得していた（図 16）。9）がん看護領域で必要な看護技術では、「持続皮下注射法」や「緩和的マッサージ法」の獲得が 50%未満であった（図 17）。

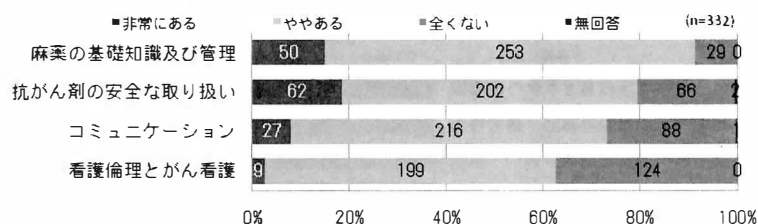


図 9 知識・技術の獲得「がん看護の基本知識」

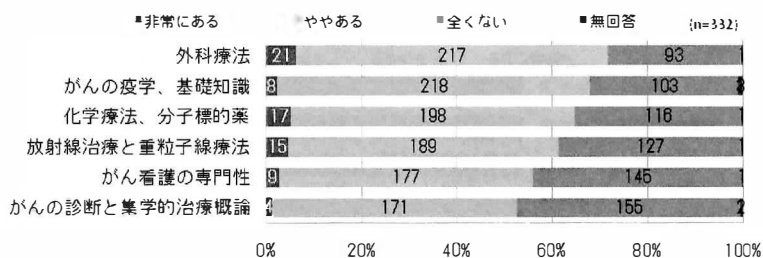


図 10 知識・技術の獲得「がんの疫学・診断・治療・看護」

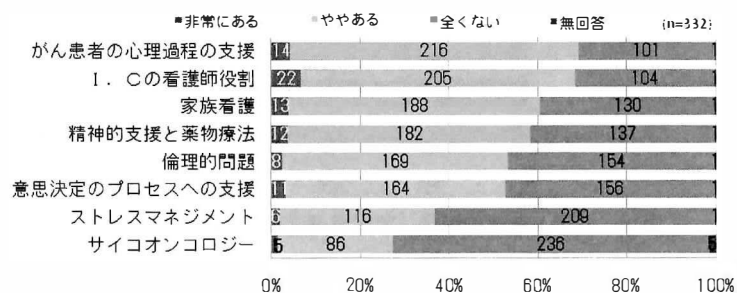


図 11 知識・技術の獲得「患者・家族の心理と看護援助」

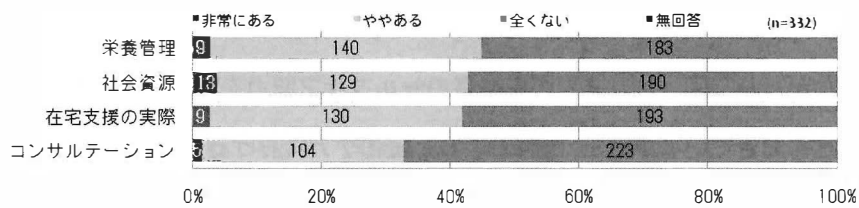


図12 知識・技術の獲得「がん患者のセルフケア能力を高める支援」

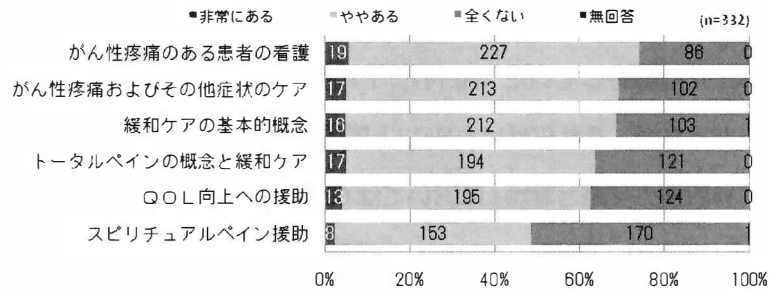


図13 知識・技術の獲得「緩和ケアにおける看護の実際」

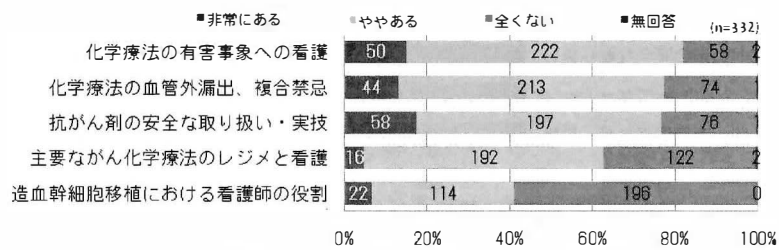


図14 知識・技術の獲得「がん化学療法における看護支援」

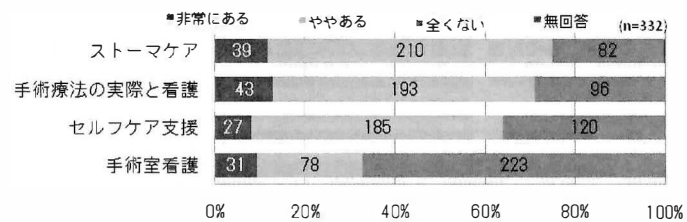


図15 知識・技術の獲得「手術療法における看護支援」

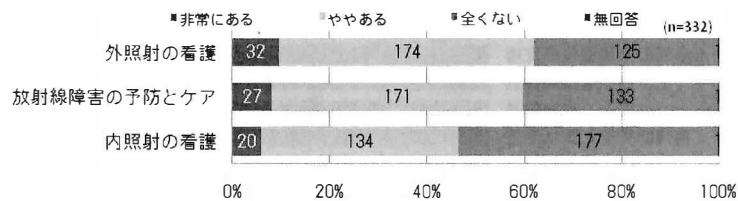


図16 知識・技術の獲得「放射線療法における看護支援」

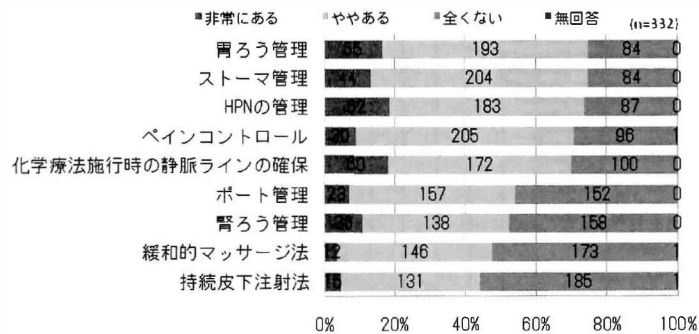


図17 知識・技術の獲得「がん看護に必要な看護技術」

また、年代別でみてみると、どの年代も「麻薬の基礎知識および管理」は獲得していた（図18～22）。また、獲得程度が高い項目は1年目では「がんの疫学・基本知識」「トータルペインの概念と緩和ケア」（図18）であったが、2～10年目では「がん化学療法の有害事象への看護」、「抗がん剤の安全な取り扱い」（図19・20）であり、11年目以上では「がん患者・家族とのコミュニケーション」（図21）があった。獲得程度が低い項目はどの年代を通して「がん看護に活かすサイコオンコロジー」、「がん看護におけるコンサルテーションの実際」であった。

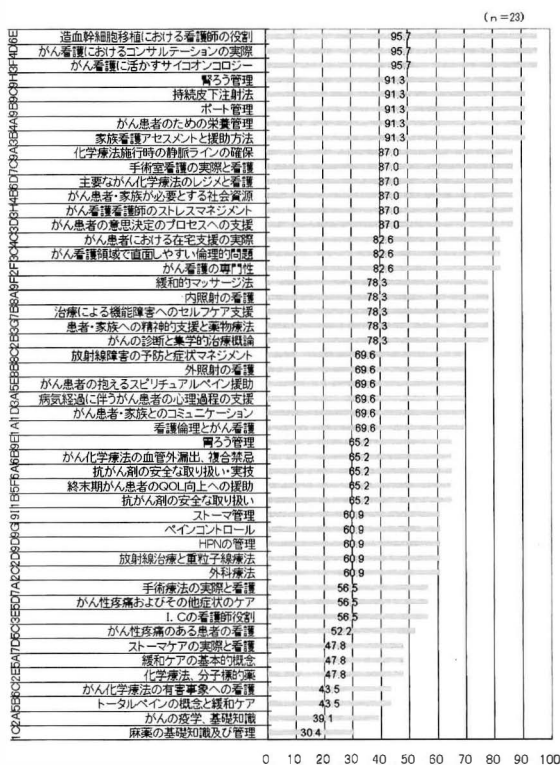


図18 知識の獲得程度「全くない」者の割合（1年目）

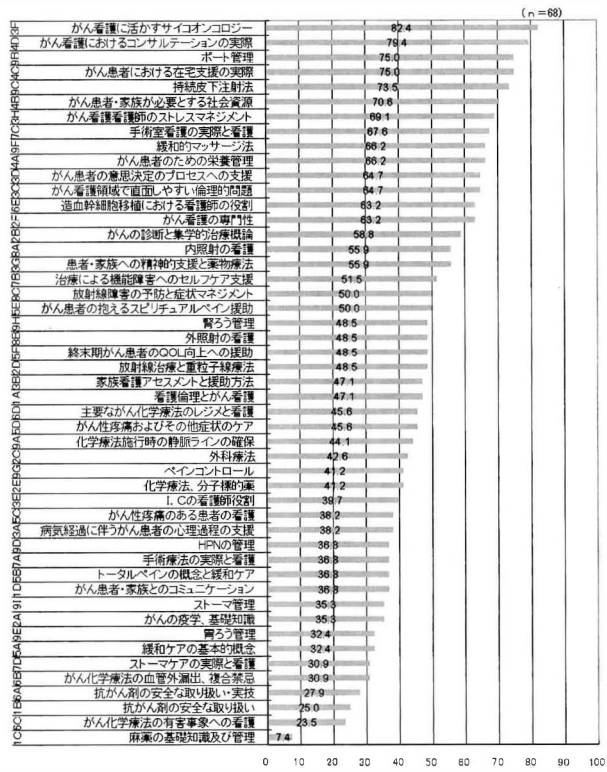


図19 知識の獲得程度「全くない」者の割合（2～3年目）

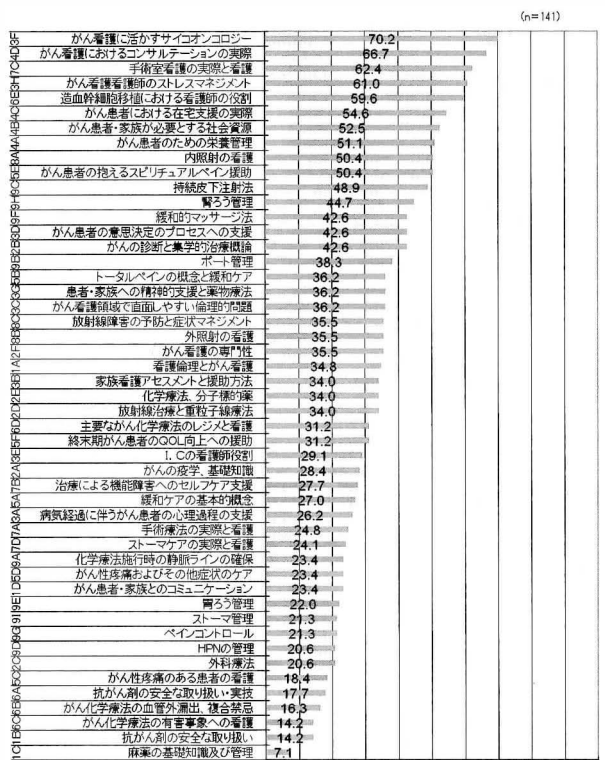


図20 知識の獲得程度「全くない」者の割合（4～10年目）

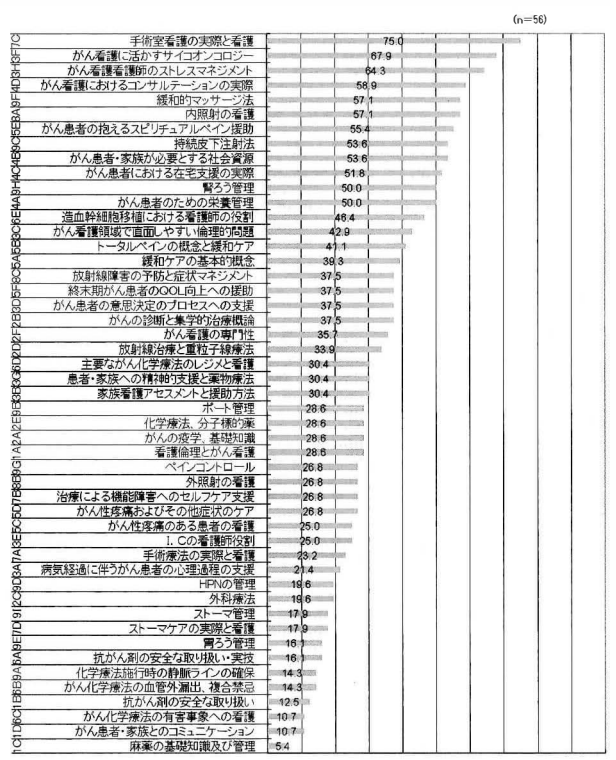


図21 知識の獲得程度「全くない」者の割合（11～20年目）

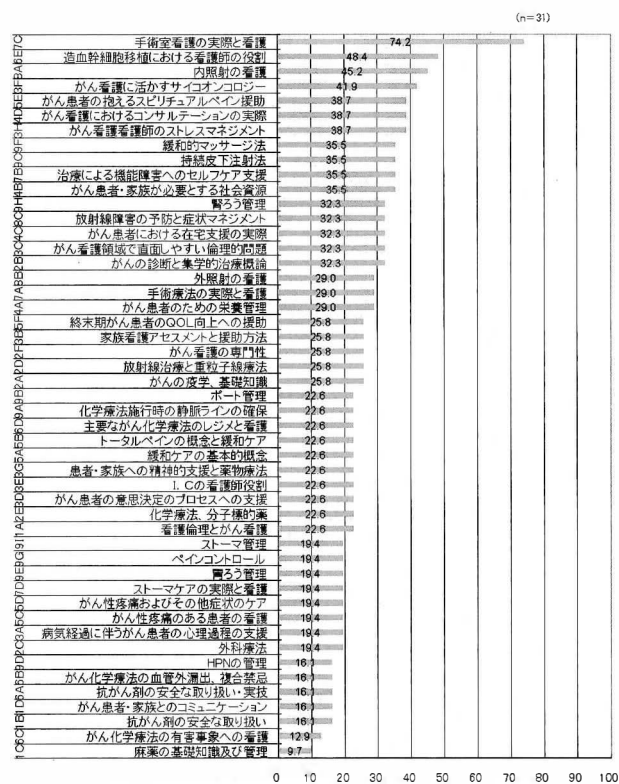


図22 知識の獲得程度「全くない」者の割合（21年目以上）

5. がん看護の知識・技術の学習希望

がん看護の知識・技術の学習希望については、「希望する」「強く希望する」をまとめるとどの項目も希望する割合が多かったため、「強く希望する」と回答した者の割合に着目した。その結果、

1) がん看護の基礎知識においては「コミュニケーション」、「麻薬の基礎知識および管理」については50%以上が希望した（図23）。2) がんの疫学、最新の診断・治療・看護については全ての項目において、半数を下回った（図24）。3) 患者・家族の心理と看護援助については「精神的支援と薬物療法」において50%以上が希望した（図25）。4) がん患者のセルフケア能力を高める支援では、「社会資源」や「在宅支援」の希望は50%以上であった（図26）。5) 緩和ケアにおける看護の実際では、「QOL向上への援助」、「がん性疼痛のある患者の看護」、「がん性疼痛やその他症状のケア」において50%以上の希望があった（図27）。6) がん化学療法における支援では、「化学療法の有害事象への看護」においては60%以上、「化学療法の血管外漏出、複合禁忌」、「抗がん剤の安全な取り扱い・実技」、「主要ながん化学療法のレジメンと看護」において50%以上が希望した（図28）。7) 手術における看護支援では、「ストーマケア」、「手術療法の実際と看護」の希望は40%以上あった（図29）。8) 放射線療法における看護支援では、全ての項目において40%程度の希望があった（図30）。9) がん看護領域で必要な看護技術では、「緩和的マッサージ法」、「ペインコントロール」の希望が50%以上あった（図31）。

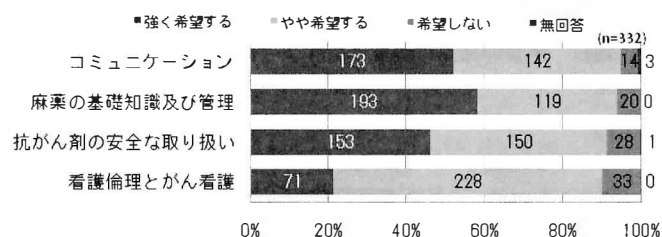


図23 学習希望の程度「がん看護の基本知識」

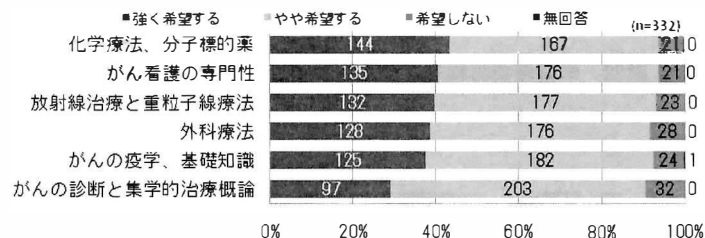


図24 学習希望の程度「がんの疫学・診断・治療・看護」

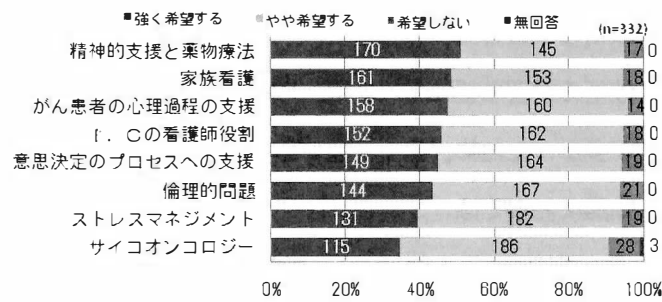


図25 学習希望の程度「患者・家族の心理と看護援助」

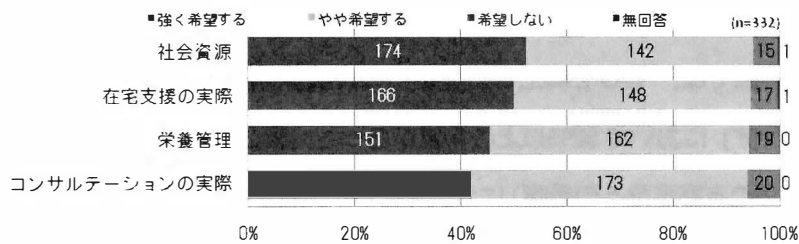


図26 学習希望の程度「がん患者のセルフケア能力を高める支援」

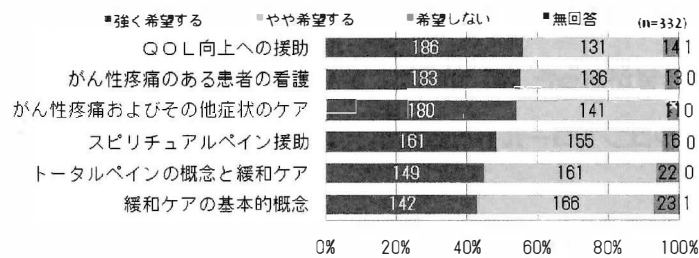


図27 学習の希望の程度「緩和ケアにおける看護の実際」

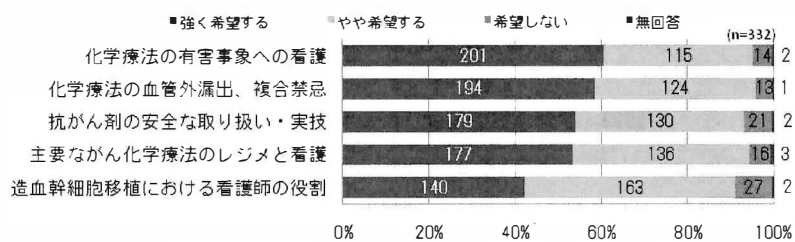


図28 学習希望の程度「がん化学療法における看護支援」

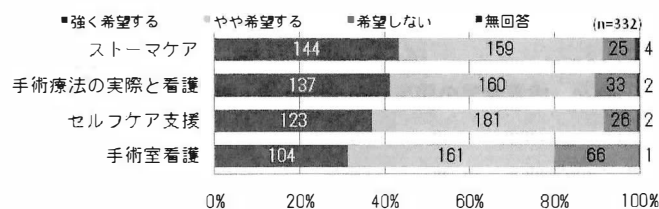


図29 学習希望の程度「手術療法における看護支援」

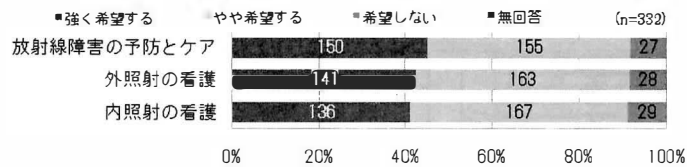


図30 学習希望の程度「放射線療法における看護支援」

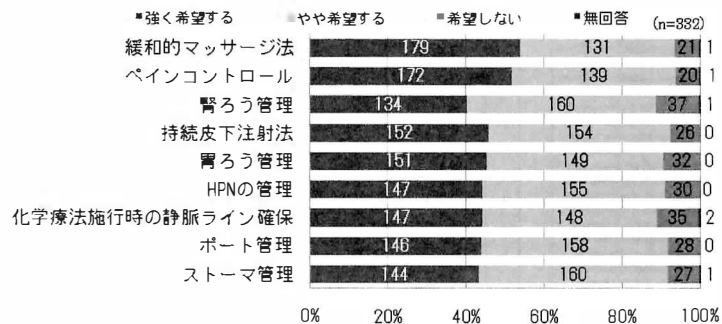


図31 学習希望の程度「がん看護領域に必要な看護技術」

また、年代別でみてみると、1年目では「看護倫理」、「診断と集学的治療」以外のすべての項目において50%以上の希望があった（図32）。2～20年目までは「化学療法の有害事象」、「化学療法の血管外漏出、複合禁忌」への希望が高く（図33～35）、21年目以上では「在宅支援」、「社会資源」、「緩和ケア」への希望が高かった（図36）。

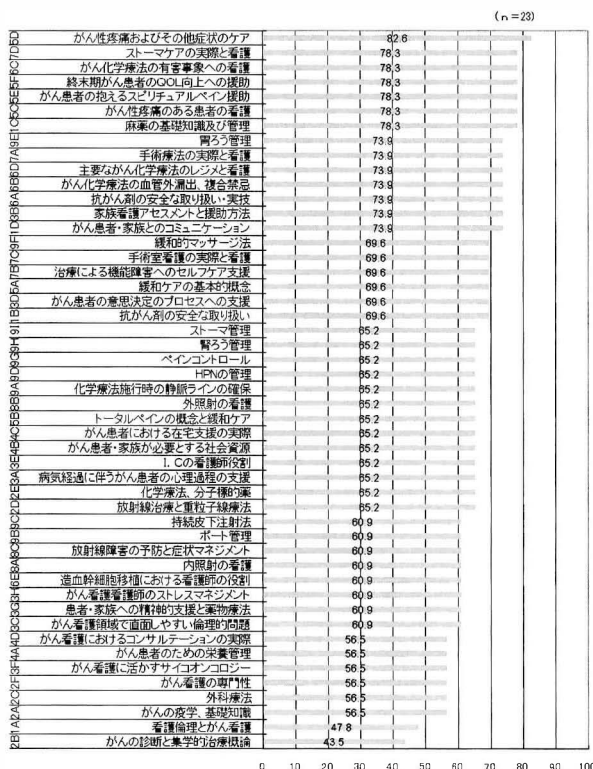


図32 学習希望の程度「強く希望する」者の割合(1年目)

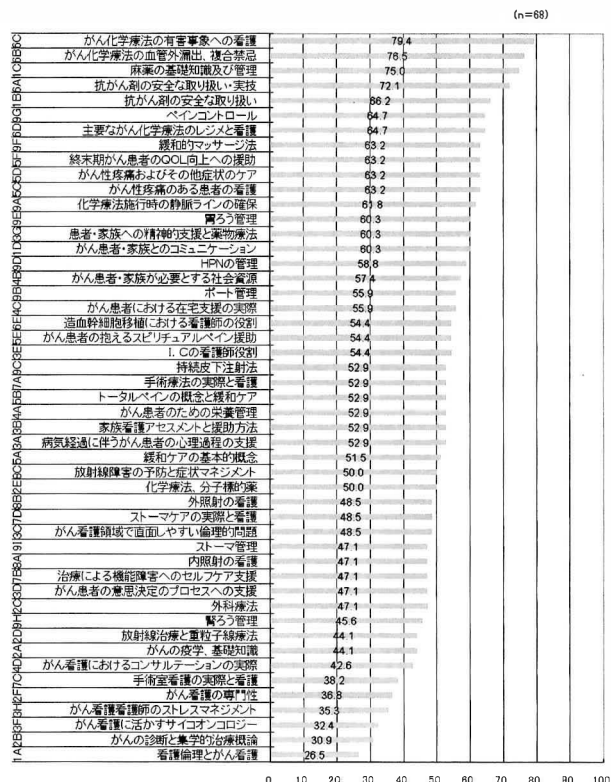


図33 学習希望の程度「強く希望する」者の割合(2～3年目)

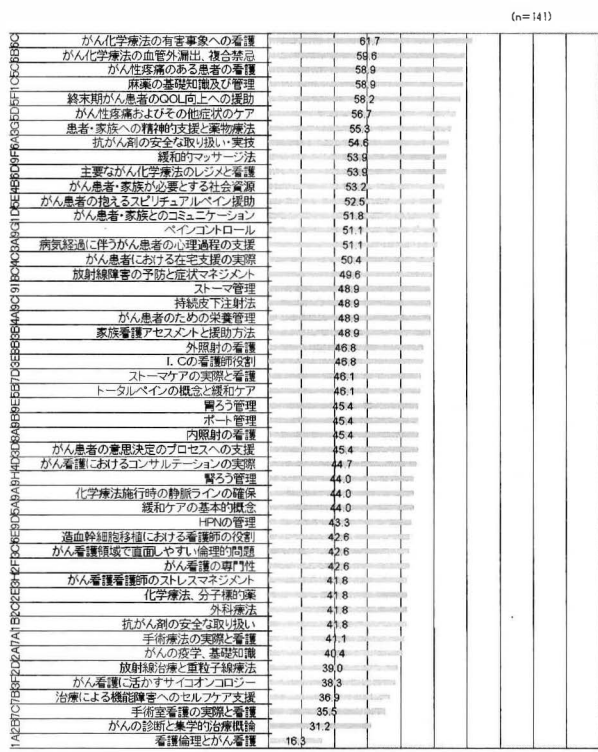


図34 学習希望の程度「強く希望する」者の割合(4～10年目)

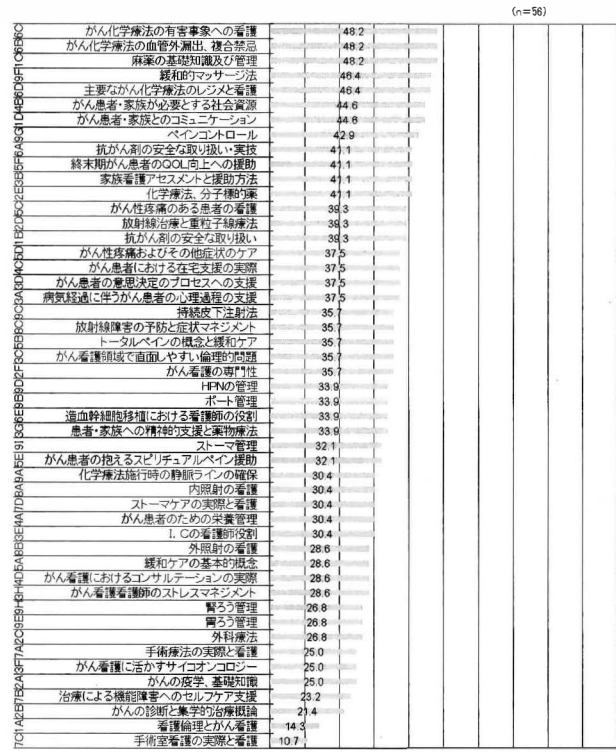


図35 学習希望の程度「強く希望する」者の割合(11～20年目)

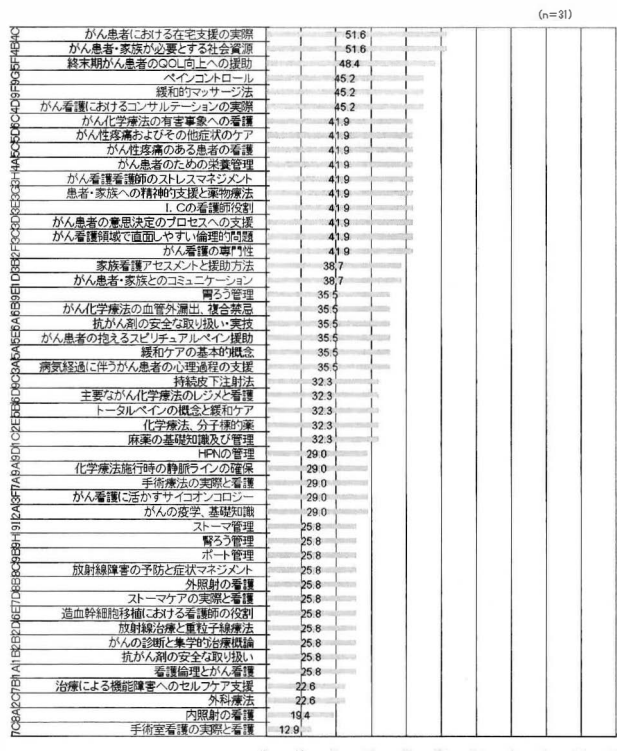


図36 学習希望の程度「強く希望する」者の割合(21年以上)

6. がん病棟と非がん病棟との知識・技術獲得程度や学習希望の比較

図37に示す通り、知識・技術獲得程度は7)手術における看護支援の2項目のみ、非がん病棟ががん病棟よりも獲得していた。また、図38に示す通り、学習希望は全ての項目においてがん病棟が非がん病棟よりも学習を希望していた。

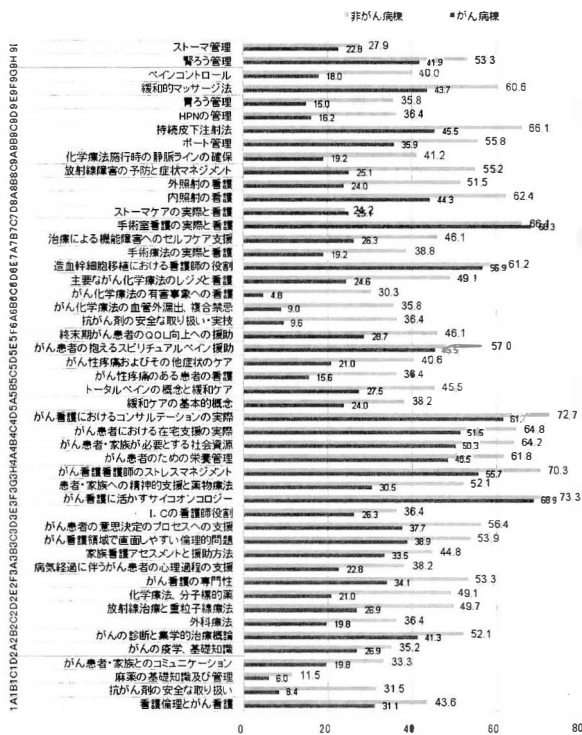


図37 がん病棟と非がん病棟の知識・技術の獲得程度の比較
「全くない」と回答した者の割合

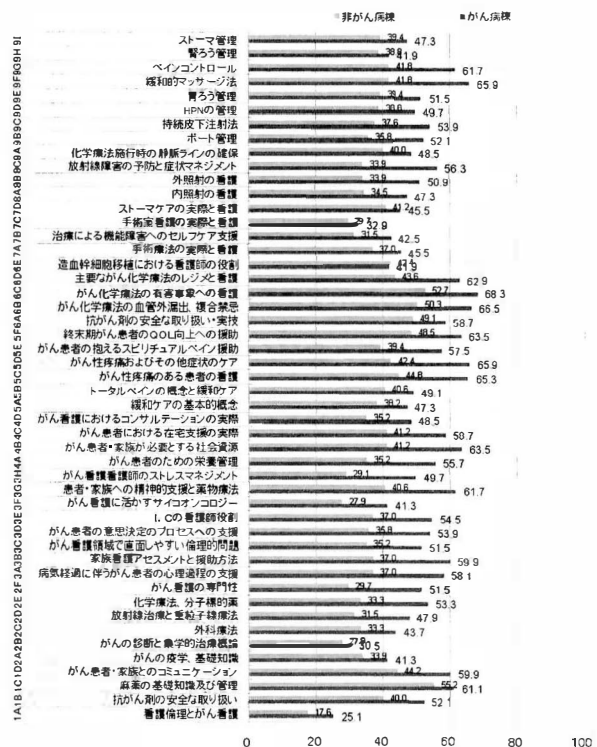


図38 がん病棟と非がん病棟の学習希望の程度の比較
「強く希望する」者の割合

考察

研修は院外よりも院内の受講率が高く、時間や金銭面を考慮して院内研修の充実が重要と考えられた。また、緩和医療の教育においては約半数以上は受けたことがなく、WHO方式癌疼痛治療法については知っている者ががん病棟に従事する看護師であっても25%程度であった。しかし、モルヒネの有用性と副作用についての説明は60%以上ができるとの回答であり、薬剤については説明はできるが、痛みの程度をアセスメントしWHOラダーに則って適切に薬剤を使用していくことには不十分であると思われた。

がん診療連携拠点病院に関しては、当院が拠点病院であることを知っている者は多かったが、その役割や他の病院が拠点病院として指定されていることは周知されておらず、啓蒙活動が必要と思われた。

知識・技術の獲得では『がん看護の基本知識』は獲得しているが、『患者・家族の心理と看護援助』『がん患者のセルフケア能力を高める支援』という精神的支援や自己管理への支援が不足していると分かった。また、『がん化学療法における看護支援』という実践的なことについては知識・技術の獲得が高いにも関わらず学習希望が多いことがわかった。更に、21 年目以上の経験が豊かな世代では『緩和ケアにおける看護の実践』『がん患者のセルフケア能力を高めるケア』にも学習希望があることが分かった。このように、『患者・家族の心理と看護援助』『がん患者のセルフケア能力を高める支援』のような知識・技術の獲得程度が低い項目について、必ずしも学習希望が高いわけではなく、知識・技術の獲得程度が高くても、実践で活かせることについての学習希望があることが分かった。また、年代別での学習希望に違いがあることが明らかになり、対象者を絞った学習計画を立てる必要があると示唆された。

また、がん病棟と非がん病棟を比べると、がん病棟の方が非がん病棟よりも知識・技術の獲得が高く関心の高さを示している。そして、非がん病棟よりもがん病棟は学習希望が高く病棟単位での学習計画を立てることも考慮する必要があることが示唆された。

結語

がん看護への関心が高く、拠点病院としての役割を果たす目的もあり、学習機会を設けることは有意義であると考えられる。しかし、従来通りの全看護師を対象とした学習会を行うのではなく、対象者を絞った学習計画を立てる必要性がある。今後の教育プログラムにおいて、がん関連認定看護師が尽力していきたい。

文献

- 1) 群馬大学医学部保健学科 神田清子 (研究者代表) : 平成 19 年度群馬大学地域貢献事業―地域で生活するがん医療者および看護師のニーズに関する調査―, 2008
- 2) 厚生労働省医政局総務課 : 平成 19 年度終末期医療に関する調査―命を支える医療を目指して― (看護師対象), 2008